

刊行にあたって

大橋幸泰(研究代表者)

本書は、2017～2020年度、科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般)17H02392)を交付された共同研究「近世日本のキリストンと異文化交流」の中間成果報告集である。

近世日本に大きな影響を与えたキリストンに注目し、その関連文書を材料に、当該期の異文化交流の実態とその歴史的意義について考察しようとする本研究は、2021年3月で終了する予定で、4年計画の3年目終了時点(2020年3月)までは、比較的順調に研究を進めることができた。研究代表者・分担者・協力者が自身の担当にしたがって、世界各地に散在するキリストン文書を調査し、その成果をそれぞれ発表してきた。また、2019年6月には、マレガプロジェクト(国文学研究資料館を拠点とした、バチカン図書館蔵マリオ・マレガ収集文書の研究チーム)と共に「近世東アジアにおけるキリストンの受容と弾圧」と題する国際シンポジウムを開催している。これにより、暫定的ではあるが、共同研究の成果と課題を共有することができたと考えている。

しかし、2020年、世界を覆ったコロナウィルス感染拡大の影響で、本共同研究も大きな制約を受けることになった。海外調査に出かけることができなくなるなど、研究計画は見直さざるをえなくなり、2020年度は前年度までに収集した史料の整理と検討のみとなった。結局、2020年度に予定していた調査は2021年度に繰り越し、2021年3月に予定していた締め括りのシンポジウムも1年先延ばしにすることにした。その結果、本共同研究の成果として一書にまとめる作業も延期せざるをえない。

とはいって、このまますべてを先送りするだけでは研究成果の公表が遅れてしまう。そこで、ここまでの中間成果として何か公表すべきではないかと考えるにいたった。本書はこうした経緯でまとめることになったものである。これはあくまで研究未完了の中間成果報告集であるので、どの論考も荒削りかもしれない。史料紹介の要素が強いのは、こうした事情からである。それでも、締め括りのシンポジウムと研究書刊行に向けて、重要な論点を提示できていると自負している。キリストンを媒介に、近世期の異文化交流はいかなる形で進んだのか。その歴史的意義はどのように評価できるか。これらの課題に対して、その前提となる素材をひとまず公表し、議論を喚起したいと思う。

2021年2月1日